令和 2 年度 8020 公募研究報告書抄録（採択番号：20-2-08）

研究課題：「睡眠時無呼吸症候群患者における口腔機能低下症と口腔機能訓練の有用性について」

研究者名：岡本俊宏[1)]、鈴木　真由美[2)]、赤城　裕一[1)]、賀川千瑛[1)]
所属：1) 東京女子医科大学　医学部　歯科口腔外科学講座
2) 東京女子医科大学　医学部 睡眠科

【目的】口腔機能低下症とは、加齢や疾患など様々な要因によって、口腔の機能が複合的に低下している疾患である。放置することにより肺炎などの全身感染症のリスクが上がり、また全身の機能低下が進行しサルコペニアへ移行するなど全身的な健康を損なう。そのため口腔機能低下に対し適切な歯科医療の介入を行うことで、口腔機能の改善だけでなく健康寿命の延伸に貢献できることが知られつつある。われわれはこれまでに当院睡眠科と共同で、閉塞性睡眠時無呼吸症（OSA）に対する口腔筋機能療法の有効性を検討し、有意に舌圧の上昇と無呼吸低呼吸指数の減少が得られたことを報告した。そして今回、新たに睡眠科に協力を得て開設した口腔機能低下症外来の現状と今後の課題探索のため、臨床的に検討を行なった。

【方法】OSA にて当院睡眠科で加療中の 65 歳以上の患者で、2020 年 7 月から 2020 年 12 月に口腔機能低下症検査の同意が得られた 23 名を対象とした。口腔機能低下症の検査 7 項目（口腔衛生状態不良、口腔乾燥、咬合力低下、舌口唇運動機能低下、低舌圧、咀嚼機能低下、嚥下機能低下）にて診断した。

【結果】９名（39%）が口腔機能低下症で、男女比は 4:5、平均年齢は 78.4 で、60 代から 80 代まで偏りなく認められた。既往症として、OSA のほか 4 名（44%）が脳血管障害や神経筋疾患、精神疾患を有した。低下している検査項目は、口腔衛生状態不良が 4 例、口腔乾燥が 5 例、咬合力低下が 8 例、舌口唇運動機能低下が 8 例、低舌圧が 5 例、咀嚼機能低下が 5 例、嚥下機能低下が 5 例であった。口腔機能低下症の点数と AHI との相関を統計処理した結果、有意に AHI と口腔機能低下点数と相関が見られたが、トレーニング前後 3 ヶ月後の舌圧では有意な変化は無かった。MFT トレーニング指導を行った 9 例中、4 例に積極的な訓練が行われていないことが判明した。

【考察・結論】高齢者において欠損歯や義歯不適合などの口腔の要因に加えて、全身疾患や薬剤の副作用などによっても口腔機能は低下しやすい。当院は急性期病院であり多種多様な疾患を有する幅広い年齢層の患者が受診しているため、各診療科へも口腔機能管理の重要性を広く認識されるよう取り組んでいく必要がある。今後、トレーニング半年後の再評価を行い指導内容のブラッシュアップを行うとともに、今回の結果より患者のトレーニングを継続するモチベーションの維持が課題であると思われた。

現在、新型コロナウイルス感染症流行下において、高齢者の外出自粛による社会参加が不足し、ますます身体機能低下の進行が予測される。自宅で可能な効率的でかつ効果的なセルフトレーニングの構築の重要性が示唆された。